



適応感を
高める
高校づくり

平成 20 年 7 月

本冊子について

入学してきた生徒全員が充実した学校生活を送れることは、高校教育に携わる者に共通する願いと言えるのではないのでしょうか。しかしながら、現実には不本意な形で不登校になったり中途退学したりという生徒も少なくありません。

そうさせないために学校に求められることは何なのか、どのような取組が生徒の学校への適応感を高めるのかを明らかにするために、国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、47都道府県（以下、県）の中から3県に御協力をお願いし、平成18年度から平成19年度の2年間にわたって高校1年生の学校適応に関する調査研究を行ってきました。

具体的には、高校1年生の学校生活に対する思いは入学直後から3月末までの間にどのように変化していくのか、そうした思いの変化と、実際に学校を休んだり離れたりする行動との間にはどのような関連があるのか、そうした思いや行動の変化の背景にはどのような学校側の取組や働き掛けがあるのか、などについて、定期的に質問紙調査を実施することによって明らかにしようとしてきました。

本冊子は、そうした実証的な調査研究の結果を踏まえ、生徒の学校適応を高めるために、どのような働き掛けや取組が有効であるのかをまとめたものです。

もちろん、どの高等学校においてもそれぞれに試行錯誤を繰り返し、工夫された実践が行われていることでしょう。しかし、そうした実践の中には、中学校時代に不登校を経験してきた生徒、不登校の傾向が強く窺われた生徒にとっては、やや負担の大きなものもあるようです。

そこで、本小冊子では、そのような生徒が他の生徒と変わることなく充実した学校生活を送ることができている高等学校を選び、その実践を紹介することにしました。その中から、高校1年生時の取組の鍵となるヒントを得ていただければ、この調査研究に携わった私たちにとっては、望外の喜びです。

最後になりましたが、この調査に御協力いただいた高等学校の先生方、そして何よりも生徒の皆さんに対して、厚く御礼を申し上げます。

平成20年7月

国立教育政策研究所生徒指導研究センター長
中岡 司

目 次

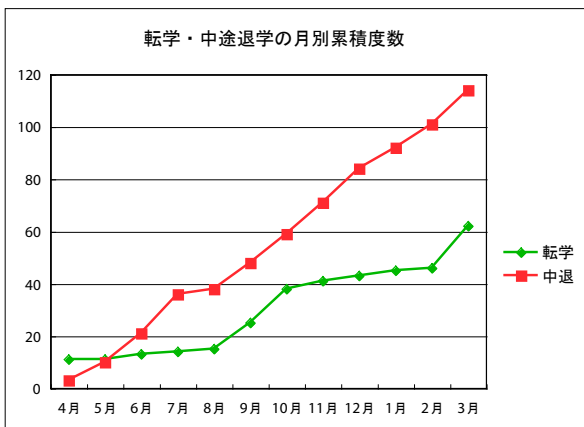
| | |
|-------------------------------------|---|
| 高校生の欠席・中途退学等の状況 | 2 |
| 不登校経験者が、安心して登校できる高校 | 3 |
| A 高校：保護者を交えた説明と対応で生徒を支える | 4 |
| B 高校：地道な情報収集と全担任による情報の共有 | 5 |
| C 高校：「指導→できる→ほめる→できる」で育む自己実現力 | 6 |
| D 高校：「不登校経験あり」群が多く入学する高校の取組 | 7 |
| まとめ | 8 |

高校生の欠席・中途退学等の状況

最初に、高等学校1年生の欠席や転学、あるいは中途退学を巡る状況がどのようなものであるかを、一つの県を例にとって見ていくことにしましょう。

この県の平成19年度の公立高等学校1年生の人数は、9000名程度になります。今回実施した『出欠状況調査』（注1）の結果によれば、その中で62名が転学、114名が中途退学、96名が休学となっています。2%程度の生徒が学校を離れ、1%強の生徒が休学していると言えるでしょう。

ちなみに、以下のグラフは、転学と中途退学の月別の推移を示したものです。転学については、その4分の1が4月時点で決断し、夏休み明けの9月と10月にさらに3分の1が、そして残る3分の1が翌年の3月時点で決断することが分かります。それに対して、中途退学については、時期にかかわらず毎月似たような割合で現れてくるのが分かります。



次に、中学校時の不登校経験の有無が高校生になってからの不登校にどのように影響するのかについて見てみましょう。

中学校の不登校の場合には、小学校時の不登校の経験が大きく二つの形で影響していることが分かっています。(注2) すなわち、①中学校1年生時の不登校生徒のほぼ半数は、小学校の4～6年生時に不登校相当（実際の欠席だけでなく、別室登校等も欠席と見なし、遅刻や早退も半日の欠

席と見なしで計算した時に欠席日数が30日以上になる)の経験を持つ「経験あり」群である、②小学校時の「経験あり」群は4月当初から欠席が目立ち始めるのに対して、「経験なし」群（小学校4～6年生の間、毎年15日未満の欠席日数であった者）は夏休み以降から欠席が目立ち始める、というものです。

| 区分 | 小学校4～6年の各学年の状況 |
|-------|--------------------------------------|
| 不登校相当 | 欠席日数+別室登校等日数+(遅刻早退日数÷2) = 30日以上 |
| 準不登校 | 欠席日数+別室登校等日数+(遅刻早退日数÷2) = 15日以上30日未満 |

| | 小学校4～6年生の3年間の状況 |
|------|--|
| 経験あり | ・3年間の間に一度でも不登校相当に該当した ・3年間とも準不登校に該当した |
| 経験なし | ・3年間とも不登校相当、準不登校のいずれにも該当しなかった |

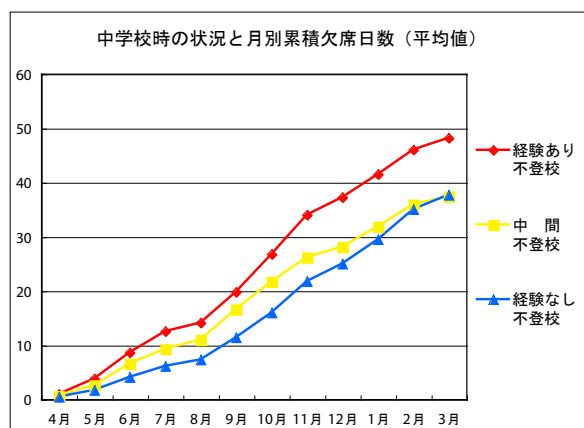
ただし、中学校の場合には義務教育段階ということもあり、不登校相当の児童は原則としてすべて進学してくるのに対し、高校の場合には中学校で不登校相当であった生徒すべてが進学してくるわけではありません。つまり、高校に進学後も不登校状態が継続する可能性の高い生徒の場合には、進学を見合わせることもあるでしょう。更には、義務教育ではないのに、あえて受験をして高校に進学してくるわけですから、不登校相当の生徒といえども、進学後に登校する気持ちの強い生徒であるとも考えられます。

実際、『高校生調査』（注3）の回答から中学校の1～3年生時に不登校相当であった（「経験あり」）と考えられる生徒は288名いますが、実際に高校1年生で不登校相当となった者（「経験あり不登校」群）はその中の94名に過ぎません。残る194名については、本人や学校の努力によって普通に登校できている者（「経験あり登校」群）であることが明らかになったのです。その一方で、中学校では15日以上30日未満の欠席相当であった生徒が高校1年生で不登校相当になった者（「中間不登校」群）は78名、中学校では3年間とも15日未満の欠席であった生徒が高校1年生で不

登校相当になった者（「経験なし不登校」群）は194名に上ることも分かりました。

| | |
|---------|--|
| 区分 | 中学校1～3年の各学年の状況 |
| 不登校相当 | 30日以上欠席であったと回答 |
| 準不登校 | 15日以上30日未満の欠席であったと回答 |
| | 中学校1～3年の3年間の状況 |
| 経験あり | ・3年間の間に一度でも不登校相当に該当した ・3年間とも準不登校に該当した |
| 経験なし | ・3年間とも不登校相当、準不登校のいずれにも該当しなかった |
| 中間 | ・上の「経験あり」「経験なし」に該当しなかった |
| 区分 | 高校1年終了時の状況 |
| 経験あり不登校 | 「経験あり」で、30日以上欠席相当 |
| 経験あり登校 | 「経験あり」で、30日未満の欠席相当 |
| 中間不登校 | 「中間」で、30日以上欠席相当 |
| 経験なし不登校 | 「経験なし」で、30日以上欠席相当 |

ちなみに、それらの「経験あり不登校」群、「中間不登校」群、「経験なし不登校」群が、1年間の間にどのような休み方をするのかについて月別に見たのが、次のグラフです。「経験あり不登校」群が他と比べて高い数字を示すことや、「経験なし不登校」群が夏休み明けに増加傾向が高まることなどが窺えますが、中学校1年生の不登校生徒が示すほどには、はっきりとした傾向とは言えません。その理由は、先に述べたとおり、義務教育段階とは異なり、あくまでも自発的に進学する高



等学校の特徴に由来するものと考えられます。

注1 転学、中途退学、休学、長期にわたる欠席等が見られた生徒について、学校側から月別欠席日数等を報告してもらったもの。

注2 『中1不登校生徒調査（中間報告）[平成14年12月実施分] -不登校の未然防止に取り組むために-』、国立教育政策研究所生徒指導研究センター、平成15年8月

注3 高校生活への満足感やストレス等について、その変容を測定する目的で、平成19年5月、7月、12月、平成20年3月の計4回にわたって調査したもの。高校生活に関する質問のほとんどは共通する内容を繰り返し尋ね、中学生時の状況に関する質問は5月調査のみで尋ねている。

不登校経験者が、安心して登校できる高校

では、中学校の1～3年生時に不登校相当であった「経験あり」群の生徒であっても、他の生徒と同様に安心して通える高校とは、どのような取組を行っている学校なのでしょう。

そこで、この県内の50余りの高等学校の中から、「経験あり」群が6名以上在籍しているにもかかわらず、全員が不登校相当ではない（すなわち、「経験あり登校」群である）ばかりか、「中間不登校」群や「経験なし不登校」群の生徒もほとんどいない、しかも転学や中途退学の生徒も多いわけではない、という高校を探してみたところ、4つの高校を抽出することができました。

そこで、それらの学校に対して、どのような取組を行っているのか、どのような点に配慮して生徒に接するようにしているのか、等について尋ね

た結果をまとめたのが、次ページ以下に示したA高校からD高校までの4つの事例です。

なお、各事例と併せて、4回にわたって行われた『高校生調査』の結果の中から、「経験あり不登校」群の高等学校適応を示唆していると思われる項目の平均値を、この県の生徒全体の平均値と比較対照できる形で示してあります。（注4）いずれのグラフからも、「経験あり登校」群の値が高かったり、改善されていったりする様子が窺えます。

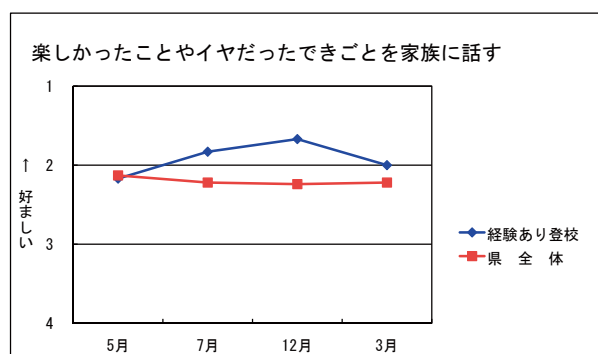
注4 各グラフは、値が上に行くほど（1に近づくほど）、表題の項目に関して好ましい結果であることを示すように作成されています。

A 高校

保護者を交えた説明と対応で生徒を支える

学校適応を促すための配慮や取組

- ①入学時、体育館にて保護者と生徒へ学校への不信感が生じないように高校生活のルールについて十分説明をし、納得してもらいました。
- ②入学時、専門高校における欠席の重みを保護者共々理解してもらい、安易な欠席に対する意識を変えてもらいました。
- ③第1学年の目標として「不登校・退学を出さない」「思いやりの心を育てる」を掲げ、互いの挨拶の意義や必要性を、入学式当日から生徒に徹底指導しました。
- ④第1学年の学年主任の授業を3限以降に組みました。(遅刻指導と生徒指導のため)
- ⑤1、2学期間は、休日前の終礼時に休みの過ごし方を指導。また、挨拶強化週間を設置し、登校時、昇降口指導と声掛けを実施しました。
- ⑥1学期間、欠席の連絡時には、必ず学級担任が保護者と連携を取り、説得や保護者による送り、あるいは場合によっては出迎え等、安易な欠席をさせない状況を作りました。
- ⑦毎学期「他人の気持ちを理解しての言動」について集会時に指導、その後各クラスにおいても具体的に指導(年間10回以上)を行いました。ま

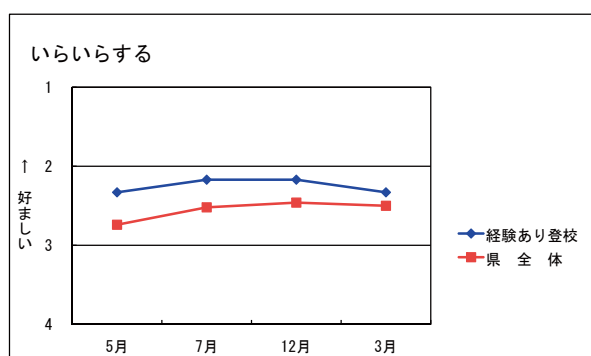


た、学年主任が集会の内容を掲示物にして、各クラスに掲示しました

⑧1学期間、月毎に、欠席や遅刻がある、元気がない生徒を対象に、学年主任面談を実施しました。

「経験あり登校」群のストレスが少ない点について

- ①教育相談週間の結果を集約し、必要な生徒に面談(担任、学年主任、教育相談部)を実施しました。
- ②1学期間毎月、欠席や遅刻があっても元気がない生徒に対して学年主任面接を実施しました。



不登校傾向のある生徒の情報収集と共有について

- ①A市校外補導協議会が中心となって、入試合格発表後、関係中学校と高校の生徒指導担当者が連絡会を持つ機会があります。
- ②市内、市外と地域毎に期日と会場を分けて関係校同士が面談を行い、必要のある生徒について情報交換をしています。
- ③毎朝、職員朝礼後学年連絡会を持ち、情報交換により兆候を事前に把握するよう努めています。
- ④長期休業終了前1週間の時点で、クラス毎に登校をさせ、課題・服装等をチェックします。気になる生徒の個別面談を実施し、必要に応じて学年主任面談、家庭訪問を実施しています。
- ⑤欠席があった場合、生徒の状況に応じて、該当学科へ保護者と共に登校してもらい、理由の把握と指導をしています。

○高校のプロフィール

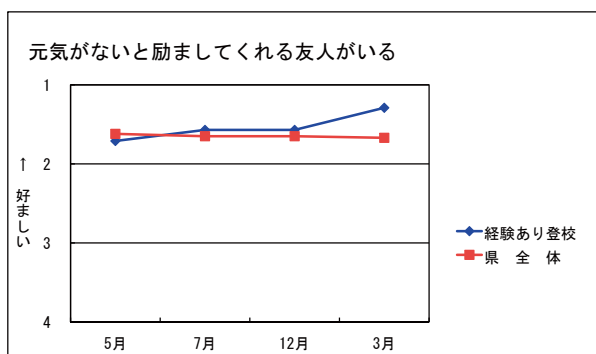
- ・専門学科
- ・1学年の生徒数 250名規模
- ・「経験あり登校」群の割合 3%

B 高校

地道な情報収集と 全担任による 情報の共有

学校適応を促すための 配慮や取組

生徒・教員共通の学年コンセプト「高め合い、
支え合って、日々成長」の下、生徒は「仲間づく
り」、教員は「協働」を目標にしてきました。



「経験あり登校」群の学校生活が 充実している点について

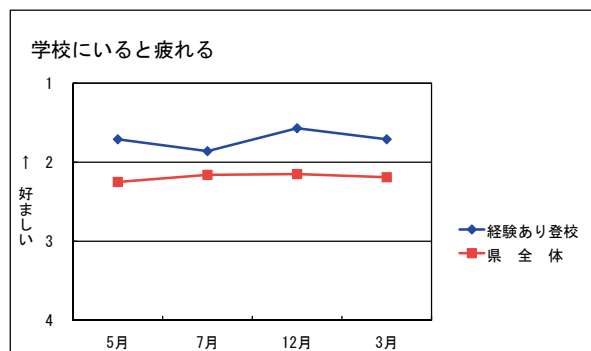
「B 高校生として本来あるべき姿」を追求して、
次々に新しい取組を実施してきました。

- ・4月 教育合宿の中での企画活動として、クラ
スごとのキャンプファイヤー／体育館一周肩組
校歌斉唱／クラスごとに工夫したユニークな歩
き方の行進
- ・7月 大長縄跳び大会
- ・8月 進路体験学習（県外の大学、専門学校にて）



→ 各クラスで発表会 → 文化祭でも掲示

- ・3学期 1年生後半から3年生で実施する総合
的な学習の時間の内容を先取り体験（面接練習
／求人票の見方／履歴書書き等）、学年主任に
よる生徒全員の面接



不登校傾向のある生徒の 情報収集と共有について

- ①入試合格発表後、**教頭・教務主任・教育相談主
任・生徒指導主事**で各中学校をまわり、**情報収集**
をしています。
- ②週1回の「**担任会議**」でクラス担任が状況説
明をして、全担任で情報の共有をしています。

○高校のプロフィール

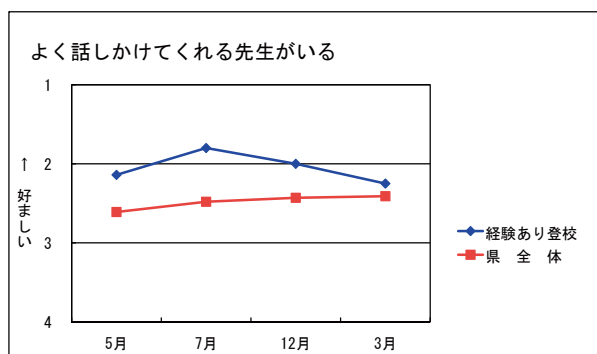
- ・専門学科
- ・1学年の生徒数 300名規模
- ・「経験あり登校」群の割合 2.5%

C 高校

「指導→できる→
ほめる→できる」
で育む自己実現力

学校適応を促すための 配慮や取組

- ①本校は総合学科で、1年生の夏頃には2年次の選択科目を決定する作業があることから、4, 6, 8, 9月に科目選択の面談を実施してきました。
- ②学級通信をこまめに出すことにより、生徒とのかかわりを作ってきました。学級経営の方針を生徒に分かりやすく伝えたり、クラスの様子（部活動・表彰・誕生日）を細かく学級通信で報告してきました。
- ③「クラスや担任を好きですか?」「それは、どうしてですか?」といったアンケートを実施し、その回答の理由も尋ねることで、生徒に不足しているものを意識させるよう試みました。
- ④学年集会を1週間に1回、必ず実施してきました。単なる伝達や服装の注意だけでなく、生徒が自分自身で高校生活や人生について考えていけるように、担任以外の先生が順番で「自分のこと」を伝えたり、学年主任が「人としての生き方」というテーマで話し掛けたりしました。

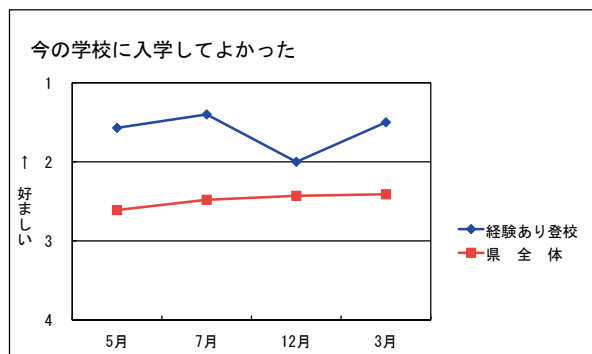


「経験あり登校」群の学校評価が 高い点について

- ①中高連絡会議において、「この生徒と一緒にしてほしい…」等と言った、細かい点まで聞いてク

ラス編成を行いました。

- ②中学時代に疎外感を経験した生徒が、過ごしやすい環境を考えました。入学当初はいろいろなことができなかった生徒を、少しずつほめていき、1年間を振り返ったときに成長した自分を振り返ることのできる状況にしました。



不登校傾向のある生徒の 情報収集と共有について

中学校訪問の実施

* C市内の中学校

- ①中学校へ本校職員が訪問。訪問者は本校の3年生の学年主任とクラス担任(1名)の計2名。(3年部が新入生のクラス分け等全般を担当するため)



- ・訪問日時は、入試合格発表後の3月20日
 - ・内容は、健康状態や対人関係などの学校生活上配慮すべき点について
 - ・中学校側の対応者は3年生の学年主任と担任等
- ②中高連絡会議の実施。年間を通じて数回実施し、入学するまでは高校の説明を中心に、入試後は生徒の情報交換をしています。

*他の地区の中学校

- ・中高連絡会議などで、情報を交換しています。

○高校のプロフィール

- ・総合学科
- ・1学年の生徒数 200名規模
- ・「経験あり登校」群の割合 3.5%

D 高校

「不登校経験あり」 群が多く入学する 高校の取組

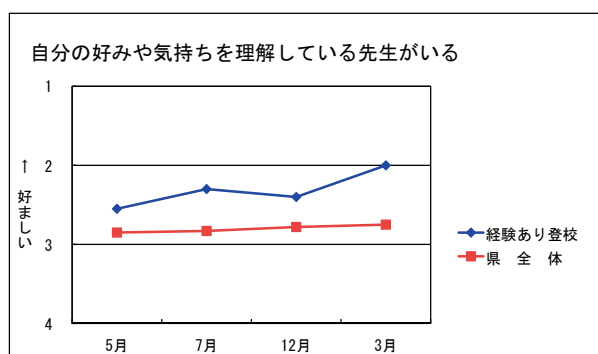
学校適応を促すための 配慮や取組

クラスのほとんどの生徒が何らかの事情で不登校を経験しており（小学校時代から不登校の生徒も数名在籍）、学校に来ること自体を難しく感じる生徒も多い中、学校に来られたことに対して、教員側から「こんにちは」というあいさつとともに「よく来たね」という声掛けを毎日全員にしてきました。

また、休む際にも「なぜ学校に来ないのか」と責めるようなことはしないようにし、「明日は待っているよ」ということを伝えるようにしました。

休みが続いた生徒には、家庭訪問をし、本人や保護者との面談を繰り返しました。

また、クラスメイト全員に、今日は誰が学校に来ていないのか、どうすれば学校に来られるようになるか、ということを考えさせ、**学校に来られない生徒の欠席が当たり前にならないように**しました。そして、担任側の声掛けだけでなく、クラスメイトからのメールや電話などを通じての声掛けを大切にしました。

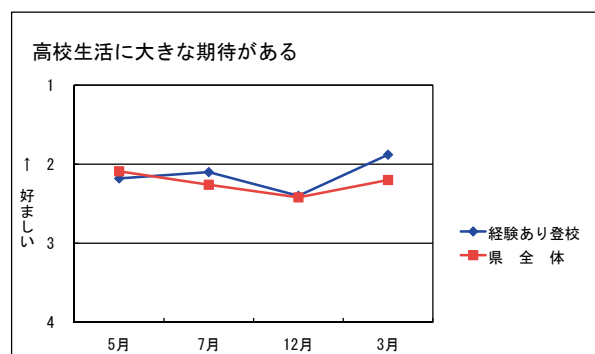


「経験あり登校」群の学校評価が 高い点について

学校生活の中で、なるべく**クラスメイト全員に**

何らかの役割（特に生徒それぞれの得意分野を考慮して）を与え、役割を果たしたどんな小さなことに対しても「ありがとう」「君のおかげで助かった」という気持ちを伝えるようにしました。

また、生徒一人一人の活躍をSHRやクラス通信の中で紹介し、クラスメイト全員に知らせるようにしました。これらを積み重ねることで、生徒たちの自己肯定感が少しずつ高まってきました。



不登校傾向のある生徒の 情報収集と共有について

入試の際に中学校から提出される調査書や、入試時の面接で不登校であったことが窺える生徒には、まず**入試合格発表後の入学者説明会や入学式当日に、保護者と本人との面談**を持ち、中学生時の様子を聞き取るようにしました。そして、生徒側の学校に配慮してほしい点、要望などをあらかじめ聞くことを心掛け、定時制の様子を伝えることで、学校生活への不安や緊張をなるべく取り除けるように意識しました。

○高校のプロフィール

- ・定時制
- ・1学年の生徒数 10名規模
- ・「経験あり登校」群の割合 90%

まとめ

4校の事例を見てみると、それぞれの学校が自校の特色を生かしつつ、それぞれの教員の熱意を傾けた取組がなされていることが分かります。

大きく共通しているのは、入試の合格発表直後から、積極的に活動していることです。中学校を回って情報を収集したり、保護者を交えて説明会を行ったり、面接週間を設けたりすることによって、不登校を未然に防ぐような手立てが講じられていることが分かります。早い段階で情報があれば後手に回ることなく対応ができますし、保護者にも積極的にかかわってもらえれば大きな力になります。

また、そのようにして収集した情報や、日々、生徒と接することによって得られた情報を、教員間で共有するような仕組みがあることも見逃せません。毎週、あるいは毎日のように、生徒について情報交換する場があることで、一部の教員だけで頑張るという状況を避けることができ、複数の目で生徒を見守る、複数の手で支える、という姿勢を維持することが可能になります。

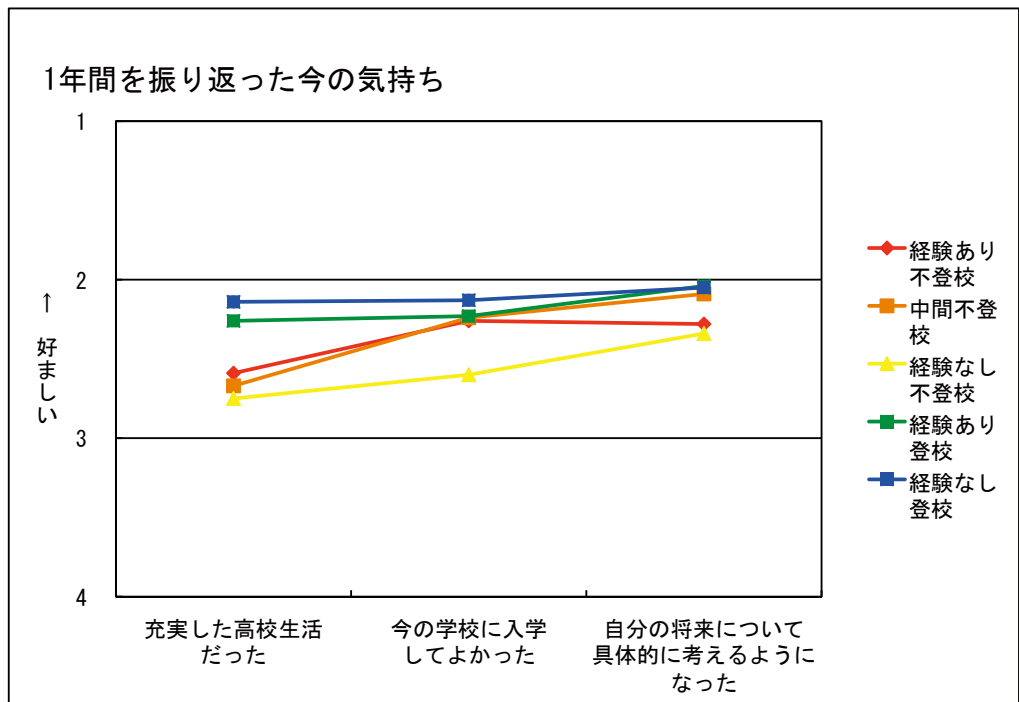
長期休業期間中にどのような活動を行うのかも、重要なポイントと言えるでしょう。学習の遅れが目立つ生徒に対する補習や、不登校傾向の見られる生徒に対する面談を行うことは、長期休業明けに生じがちな生徒の欠席を減らす上で、大きな役割を果たすことでしょう。もちろん、ふだんから欠点を取らせないような指導や、ふだんからの声掛

けが重要なことは言うまでもありません。

生徒が進んで自分の将来について考えていく姿勢を持たせるための工夫も幾つか見られます。進路について考えさせる機会や面談を数多く持つこと、教員が「自分のこと」を生徒に対して語って聞かせることなど、生徒が自分の生き方や将来について考えていくきっかけを積極的に作っていくことが大切です。

さらに、生徒自身が主体的に取り組むように働き掛けることも大事なことです。自分のことだけでなく他人のことも考えて行動するよう促したり、実際にどのように日々を過ごしていくことが望ましいのかを意識させて学校生活を送らせていくことが、生徒の成長につながります。あるいは、学年集会や、季節的な行事の機会を積極的に活用して、主体的な取組を促したり、自分たちの生活を振り返らせることも有意義でしょう。

ここで指摘してきたことは、どの高校においても多かれ少なかれ実施されていることであり、特に目新しいといったことではないでしょう。しかし、それが学校全体として取り組まれているとき



に、初めてその効果は現れてくるということが、これらの事例から窺えるのではないのでしょうか。

一部の教員が一部の生徒を変えていくことは、さほど困難なことではありません。しかし、すべての生徒に対して、不登校傾向のある生徒や学力に問題のある生徒なども含め、どの生徒に対しても効果を上げていく取組にするためには、一つ一つの取組がばらばらになされるのではなく、学年

主任を中心として学年の教師がまとまり、学校としての一連の取組を進めていくことが大切なのです。

実際に、この1年間を振り返ったときの気持ちを見た場合でも、「(不登校) 経験あり登校」群の生徒が、「(不登校) 経験なし登校」群とほとんど変わらないほど充実した高校生活を送っていることが分かります。

<作成協力委員> ※職名は平成20年7月1日現在

| | |
|-------|----------------------|
| 安達祥光 | 石川県立羽咋工業高等学校教諭 |
| 小久保正己 | 元東京都立大江戸高等学校長 |
| 小林正幸 | 東京学芸大学教授 |
| 佐藤晃洋 | 大分県教育庁生徒指導推進室指導主事兼主幹 |
| 森田洋司 | 大阪樟蔭女子大学長 |
| 山上浩一 | 大阪府教育委員会高等学校課主任指導主事 |



文部科学省

国立教育政策研究所

National Institute for Educational Policy Research

編集 生徒指導研究センター

TEL 03-6733-6882

FAX 03-6733-6967